HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	リサーチ・アシスタント(RA)成果報告書
Citation	研究論集, 21, 255（左）-264（左）
Issue Date	2022-01-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/84000
Type	other
File Information	18_rjgshhs_21_p255-264_l.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

リサーチ・アシスタント(RA)成果報告書

文学研究院研究プロジェクト「人文学と社会」について

文学研究院研究プロジェクト「人文学と社会」は，文学院博士後期課程の学生をリサーチ・アシスタントとして採用することにより，学生を経済的に支援し，博士論文の早期提出および内容の充実を図るとともに，学生の研究環境の充実および若手研究者としての研究遂行能力を養成することを目的としています。

文学院には，令和２年度，178 名の博士後期課程の大学院生が在籍し，そのうち７名がリサーチ･アシスタントとして独自のテーマについて研究を進めてきました。その研究テーマ一覧と，１年間の研究成果の概要報告を，『研究論集』の資料として掲載しています。

研究テーマ一覧

令和２年度

氏　　名	研　究　テ　ー　マ	頁
祁　　京	ピアノの初見視奏を規定する要因の解明：サンプルの統合による再分析，予見時行動の影響，演奏能力との関連性に焦点を当てて	257
栗　　楨	分析美学における美的不道徳主義についての研究	258
中　村　真衣佳	助動詞「なり」の通時的考察：歴史語用論の観点から	259
呉　　憂	ジャズ・エイジのアメリカ文学における音楽性 ── ウィリアム・フォークナーの作品を中心に	261
木　村　　聡	日中戦争における海軍の戦争指導 ── 第３艦隊と連合艦隊を中心に ──	262
李　　娜	日本語の可能構文に関する発話機能及び使用動機について ── 否定の例を中心として ──	263
福　井　慶　丈	近代朝鮮の「美術」をめぐる制度史・思想史的研究	264

研究成果の概要

研究テーマ	ピアノの初見視奏を規定する要因の解明：サンプルの統合による再分析，予見時行動の影響，演奏能力との関連性に焦点を当てて
RA氏名	祁（き）　京（きょう）
専攻・講座・研究室・学年	人間科学専攻　心理学講座　心理学研究室　博士後期課程3年
指導教員氏名	安　達　真由美

研究成果の概要

1．研究目的

本研究は，**初見視奏**という技能**における情報処理プロセス**（i.e., **入力処理，視覚運動変換処理，実行**）の効率性および正確性を測定することにより，**それぞれの情報処理の間の関係性**を解明する。次に，**準備段階の予見時行動，および演奏者の音楽経験が初見視奏における情報処理に及ぼす影響**を調べるその一方，**視聴覚情報処理の整合性，または独奏能力が初見視奏能力との間の関連性**を検討する。さらに，これらの影響要素を整理した上，**初見視奏のパフォーマンスを規定する要因を包括的に把握しモデル化する**ことを目的とする。

2．研究計画

本年度の計画では，32名のピアノ熟達者を対象とし，(1)初見視奏におけるそれぞれの情報処理の間の関係性を再検討する。(2)視手範囲を測るもう一つの指標であるB-EHSを追加分析し，(3)視聴覚同異判断のデータを分析し，視聴覚情報処理の整合性が初見視奏の情報処理との間の関連性について検討する。(4)二人のピアニストの審査により得られた独奏能力に対する評価を分析し，独奏能力と初見視奏能力の間の関連性について検討する。さらに，(5)準備段階に行った予見時行動を分析し，これらの行動が初見視奏の情報処理や参加者の自己評価に及ぼす影響について検討する。上述の分析結果を吟味し，初見視奏における情報処理のモデルを提案する。今年度の11月末まで，博士学位申請論文にまとめ上げ提出する。

3．研究結果

研究結果としては，まず，**初見視奏における情報処理のモデルを提案した**。効率的な入力処理により，視覚情報を指の運動への変換処理の効率性が向上され，実行の正確率も高くなることが明らかになった。次に，**音楽経験，予見時行動，および視聴覚情報処理の整合性というぞれぞれの影響要因が，初見視奏における情報処理との間の相互関係をモデル化した**。本研究は，異なる側面での検討により提案されたモデルを基づく，初見視奏における情報処理プロセスに関する理論的体系が確立され，さらなる研究の基盤になるものである。さらに，**初見視奏能力が高い演奏者の独奏能力も高い**ことにより，演奏者の独奏能力を向上されるための不可欠な技能とし，初見視奏をより重視するような結果が得られ，**初見視奏の音楽教育的位置付けを強調した**。なお，今年度の11月30日に，RAの研究成果を組み込んだ博士学位申請論文「初見視奏のパフォーマンスを規定する要因の解明」を北海道大学に提出した。追って同大から，文学博士学位を授与される見込みである。

研究テーマ	分析美学における美的不道徳主義についての研究
R A 氏名	栗（りつ）　楨（てい）
専攻・講座・研究室・学年	人文学専攻　哲学宗教学講座　哲学倫理学研究室　博士後期課程 3 年
指導教員氏名	藏　田　伸　雄

研究成果の概要

芸術作品における道徳と美の関連性研究は最近三十年間分析美学領域での中心議題の一つである。

作品における道徳的価値は如何に作品の美的・芸術的価値に影響するのかという問題に対して, 学者たちの観点が大まかに三つに分けることができる。まず, 芸術作品の道徳的メリットが作品の美的価値になると主張する美的倫理主義（或いは，美的道徳主義）がある。さらに，倫理主義の反対面として，作品の道徳的欠点が作品の美的価値になると主張する美的不道徳主義がある。最後に，芸術作品の認識的価値および道徳的価値と作品の美的価値とは全く無関係だと主張する美的自律主義がある。

本研究は美的道徳主義の反面として存在する美的不道徳主義の可能性を着目している。

具体的に，本研究は今までの学者たちが提出した不道徳主義を支持する論証を検証し，それらの問題点を指摘する。最後に，Transgressive Art という種類の芸術作品において，美的不道徳主義が成立することを証明する。

この一年の間に，私は Anne Eaton が提出した Robust Immoralism，Ted Nannicelli が提出した Genetic Approach そして，Scott Woodcock が提出した Relative Funny Jokes という三つの不道徳主義を支持する論証を，Panos Paris による不道徳主義批判を含めて詳しく検証した成果を日本哲学会大会で発表した。さらに，不道徳主義を支持するオリジナル論証として，Transgressive Art における不道徳主義を論証する学術論文を *Philosophical Quarterly* で発表する予定である。

研究テーマ	助動詞「なり」の通時的考察： 歴史語用論の観点から
RA氏名	中村（なかむら）　真衣佳（まいか）
専攻・講座・研究室・学年	言語文学専攻　言語情報学講座　言語科学研究室　博士後期課程3年
指導教員氏名	加藤　重広

研究成果の概要

1．はじめに

本研究では，現代日本語の名詞述語文の形態的多様性と多義性を問題点とし，その要因が古代語の助動詞における断定「なり」と用法に証拠性の記述がある終止形接続の「なり」「めり」の通時的変遷にあるという仮説を立て研究を進めた。

現代日本語の名詞述語文を形成する助動詞には，「である」「だ」「です」の3つの形態が存在する。これらは，名詞述語文の重要な構文であると言われる(1)措定文，(2)指定文，(3)同定文において繋辞（コピュラ）として機能する。しかし，コピュラ形態の違いは話者の心的態度の異なりを表し，使用される文脈も同一ではない。

(1)花子は学生　{である/だ/です}。

(2)さくらももこが『コジコジ』の作者　{である/だ/です}。

(3)花子の妹がこの子　{である/だ/です}。

「だ」は幅広い証拠性のもとに使用され，多くの意味機能をもつと考えられる。叙述類型の観点から「だ」により形成される名詞述語文に着目すると，名詞述語文の典型である(1)の属性叙述のみならず動詞述語文が担うとされる(4a)の事象叙述を表すことができる。(4a)は，(4b)の動詞述語文と命題内容が重なる点で語用論的選好の問題がある。

(4)a 子供たちが鬼ごっこだ。b 子供たちが鬼ごっこをしている。

山口（2002）によると，古代語では助動詞の「なり」が断定の代表で，中世にはそれと入れ替わるように「である」が形成され，さらに「だ」へと変化した。小田（2015）は，証拠性を持って成立した認識が推定であるとし，古代語で推定を表す法助動詞として終止形接続の「べし・まじ・らし・なり・めり」をあげている。小田（2015）は，終止形接続の「なり」が聴覚，「めり」が視覚に基づく推定であることを述べたうえでさらなる分析を進め，これら助動詞の証拠性と使用される文脈が時代と共に多様性を帯びていることを指摘している。

2．研究目的

終止形接続「なり」（伝聞推定）が証拠性にもとづく助動詞として記述されるなか，連体形接続「なり」（断定）が証拠性の観点から記述されていないのはなぜだろうか。『日本国語大辞典』第2版（小学館）によると，終止形接続「なり」「めり」の語源は，「鳴 / 音＋あり」「見え/見/目＋あり」のように聴覚・視覚に由来したのに対して，連体形接続「なり」は，格助詞「に」と動詞「あり」との融合したものである。この事実をもとに推察すると終止形接続「なり」「めり」は，その語源を根拠として証拠性の記述がされていると考えられる。したがって，連体形接続「なり」（断定）に証拠性の記述がないことは，証拠性が存在しないことを意味するのではない。証拠性による観点が欠落していると考えられ，意味機能の記述に問題が

残っていると指摘できる。断定をどのように定義するかにもよるが，断定を話者による判断・認識のもとに成り立つ意味機能であると捉えると，そこには根拠となる証拠性が存在しているはずである。連体形接続「なり」（断定）の証拠性を明らかにすることは，断定とは一体何であるのかを再考することに通じ，意味機能の記述の細分化が可能になる。また，「だ」の多義性の要因を解明することも期待される。そこで，本研究では連体形接続「なり」（断定）の証拠性にはどのようなものがあるかを明らかにし，古代語と現代日本語の繋辞（コピュラ）を対照分析して日本語における名詞述語文の形態と意味機能の拡張／縮小の方向性を明らかにすることを目的として研究を進めた。

3．研究方法

中古・中世・近代・近現代の用例を収集し歴史語用論の観点から助動詞が承接する言語形態，文脈，証拠性に着目して分析することで話者の認識・判断を表す繋辞の意味機能を明らかにすることを試みた。用例は，「日本語歴史コーパス（CHJ）」（国立国語研究所）を用いて表 1 の方法で短単位検索をして収集した。接続形態は，表 2 の項目ごとに分類した。文脈は，加藤（2017）に倣い形式文脈，状況文脈，知識文脈の観点から考察した。証拠性は，直接的証拠性（視覚，聴覚，触覚，嗅覚，味覚）と間接的証拠性（個人的記憶，学習記憶，社会的慣習）の観点から分析した。

表 1　CHJ 用例検索の方法

検索種別：短単位検索	
語彙素読み	ナリ/ダ/デアル
活用形：大分類	終止形
品詞：大分類	助動詞
後方共起	。

表 2　言語形態の分類

承接形態	備考
単純語	
複合語	
連体修飾句	「の」を伴う N の N など
関係節	
名詞節	「こと」など形式名詞が主名詞
慣用句	挨拶表現含む
定型表現	「そうだ」の「そう」など
文末助動詞	
その他	文単位など

4．成果

本研究は，現代語「だ」の意味範囲が広く，断定「なり」よりも多義的になっていることを問題点として名詞述語文の意味機能が通時的にどのように変化してきたのか明らかにすることを目的とした。証拠性を持ち話者の判断・認識を表す助動詞の形態が古代語において衰退していくなかで，断定「なり」が表わす意味範囲の判断・認識の領域が拡大したことが分かった。そして，江戸時代に断定「なり」と「だ」が共存するようになると，「だ」は名詞に後接することに特化しはじめ，人称詞や疑問詞の口語的形態，感情を表す形容動詞語幹など話し手の認識を反映する語に多く接続するようになる。話者の判断・認識を表す助動詞形態が古代語から現代語にかけて縮小する一方で，断定の助動詞「なり」が担う証拠性の幅が拡張しその影響が「だ」にも及び現代語において「だ」が多義的となる素地を形成したことが分かった。つまり，名詞述語文の意味機能は通時的に拡大している。

研究テーマ	ジャズ・エイジのアメリカ文学における音楽性 ── ウィリアム・フォークナーの作品を中心に
RA氏名	呉（ご）　憂（ゆう）
専攻・講座・研究室・学年	人文学専攻　表現文化論講座　欧米文学研究室　博士後期課程3年
指導教員氏名	竹　内　康　浩

研究成果の概要

本研究の目的は，ウィリアム・フォークナーの小説を中心に，ジャズ・エイジのアメリカ文学作品における同時代音楽の影響及びその結果として形成された特質を究明することである。

上記の目的を果たすために，close reading，biographical study と cultural study の三つの研究方法を総合的に扱い，フォークナーの作品を読み解くと同時に，同時代に活動した音楽家の作品との共通点を探る。まずは，フォークナーがジャズ・エイジと呼ばれる期間に執筆した小説作品（長編小説『死の床に横たわりて』，短編小説「あの夕陽」と「エミリーに薔薇を」）を精読し，創作手法における特徴を見出す。次に，先行研究と伝記のほか，フォークナーの手紙と書評を加え，フォークナーと音楽との新たな接続点を見つける。最後に，W・C・ハンティやジョージ・ガーシュウィンなどフォークナーが影響を受けた音楽家の音楽作品及びその批評と研究などを踏まえながら，小説作品の中の音楽的要素を見出し，その効果を解明する。

研究の成果としては，1)長編小説『死の床に横たわりて』(1930) とジョージ・ガーシュウィンの音楽代表作『ラプソディ・イン・ブルー』(1924) との比較研究を行った。フォークナーは後者の独特の音楽手法を参考し，自分の小説において応用されていることを明らかにした。例えば，声の模倣，テンポの変化などの技法により，作品の内部にふくまれるユーモアな雰囲気と人物の感情の変化が視覚化された。2)短編小説「あの夕陽」(1931) と W・C・ハンティの『セントルイス・ブルース』(1914) との比較研究を行った。まず，フォークナーは「ブルースの父」と呼ばれたハンティとの出会いにより，影響を受けたことを示した。次に，「あの夕陽」とハンティの『セントルイス・ブルース』との関係について検討し，フォークナーは後者のプロットだけではなく，ブルース独特の音楽手法を参考したことを明らかにした。

研究テーマ	日中戦争における海軍の戦争指導 ── 第 3 艦隊と連合艦隊を中心に ──
R A 氏名	木村（きむら）　聡（さとし）
専攻・研究室・学年	歴史地域文化学専攻　日本史学　研究室　博士後期課程 3 年
指導教員氏名	川　口　暁　弘

研究成果の概要

本研究では令和 2 年度博士論文「連合艦隊論」の一部として，日中戦争の前線部隊の行動と全体の戦争指導の関係を検証した。具体的には，①現場の第 3 艦隊の作戦行動と，同艦隊の支那方面艦隊への再編，② 2.26 事件前後に海軍の抱えた政治課題が，日中戦争によって如何に解消，ないしは変質したか，③現場艦隊の作戦行動が陸軍側作戦へ如何に影響したか，の 3 点を検証し，以上の 3 点を検証したのち，日中戦争を経た連合艦隊や海軍の戦争指導体制が如何に太平洋戦争へとつながっているかを検証した。

検証の結果は次の通り。まず，連合艦隊は第 2 次上海事変の勃発により，訓練を中止し，援軍として派遣された。現地の第 3 艦隊は戦力不足による不利が予想されていたが，航空機による都市爆撃を敢行して前線を支えた。しかし陸軍との協同はうまくいかず，軍令部が協同の方式を指示しなければいけなかった。戦局が奥地へと移ると，連合艦隊は必要なくなり撤収した。第 3 艦隊を分割した第 4 艦隊や第 5 艦隊が新たに編成され，沿岸警備と陸軍の作戦支援に従事した。しかし，空母などの航空部隊は連合艦隊から派遣され続けた。日中戦争の支援に空母が駆り出されたために，連合艦隊は航空機の夜間・払暁攻撃の訓練と空母の集中運用の計画を延期した。また戦争の影響で航空部隊が急速に拡大し，十分な訓練も終えていない部隊が配属されるようになった。

一方で，日中戦争は連合艦隊の本格動員と拡張を促した。連合艦隊は急速に拡大し，司令長官による全部隊の直率は不可能になり，司令部は部隊から遊離した。日中戦争中に企画された空母部隊の集中運用も実現された。この改革を主導したのが山本五十六だった。

研究テーマ	日本語の可能構文に関する発話機能及び使用動機について ── 否定の例を中心として ──
RA氏名	李（り）　娜（な）
専攻・講座・研究室・学年	言語文学専攻　言語情報学講座　研究室　博士後期課程３年
指導教員氏名	加　藤　重　広

研究成果の概要

【研究目的】

本研究は，否定の可能構文から見られた可能以外の用法を対象とし，これらの用法の解釈及び使用動機を解明することを目的とする。可能構文は，これまでに可能の意味用法（「能力可能」と「状況可能」）を主として議論されてきた。しかし，「明日の会議に出られませんか。」「このパソコンは使用できません。」のような例からわかるように，可能形式は可能のみならず，依頼や禁止などの用法でも用いられる。本研究は，このような可能形式が表す非可能の用法について，形式と機能の２方向のアプローチから分析する。すなわち，可能構文の機能を分析すると同時に，同様の機能を有している形式間の差異や選択動機も明らかにすることを試みる。

【研究の計画】

本年度の計画として，まず用法の記述や解釈に用いる「発話内力」「推意」「ポライトネス」の３つの概念を整理し，具体例を考察しながら，理論枠組みを再検討する。また，その結果を『北海道大学大学院文学院研究論集』に投稿する。次に否定の可能構文の用法について分析したものを12月に開催される日本語用論学会で発表する。そして，これまでに行なってきた個別研究を考察直し，来年度の投稿論文や博士論文に向けた準備を取り組む。

【成果】

研究の成果として挙げられるのは，まず理論枠組みに関する再検討である。上記で挙げている「発話内力」と「推意」は，本来では別の理論体系にある概念であるが，推意の概念を援用することで，発話内力を発動するための意味獲得に関するプロセスが解釈できるようになった。また，可能形式が非可能の用法に用いられる際の使用動機を分析するポライトネス理論ついて，文脈を重視した上で会話における聞き手側からの判断を加え，相互行為的なアプローチを採用した。次に会話における具体例のデータ分析である。従来では，否定の可能構文は禁止の用法があると指摘されたが，本研究では「動作主の種類」「可能の意味分類」「先行文脈のタイプ」の３つの側面から考察し，「禁止」の他「依頼」や「断り」という用法があることはわかった。さらに，これらの用法は推意に由来し，それぞれの固着度が異なるが，慣習化が見られた。

研究テーマ	近代朝鮮の「美術」をめぐる制度史・思想史的研究
RA 氏名	福井慶丈（ふくい よしたけ）
専攻・研究室・学年	人文学専攻　日本史学専修　博士後期課程 3 年
指導教員氏名	白木沢　旭　児

研究成果の概要

【研究の目的】植民地期朝鮮（1910–1945）の美術関連の論説に関して，個別のテクストの内外にある多様な情報を掬い上げることで，従来の研究が陥ってきた特定の図式への性急な落とし込み（伝統的な芸術論／西洋由来の芸術論，工業と一体化した美術／芸術の一ジャンルとしての美術，など）を避け，より立体的な歴史像を再構成することを目指す。【研究計画】朝鮮人による朝鮮美術論の最初期のもので，従来の研究では見落とされていた，女性独立運動家・申摩実那（シン・マシルラ，1892–1965）の「朝鮮美術」（『公道』第 2 号，1914 年 11 月，pp.28–32）を主要な分析対象とする。その際，執筆背景を浮き彫りにすること，資料を全体的に読み込むことに留意する。【成果】執筆背景に関して，申摩実那は，当時の朝鮮では先駆的な女子高等教育機関であった梨花学堂大学科の一期生で，1914 年春に行なわれた卒業演説のテーマは「朝鮮美術探究」であった。このことから，論説「朝鮮美術」は，彼女の卒業研究と密接に関連しているといえる。全体的な読み込みに関しては，全訳注を作成した。この作業を通して，「朝鮮美術」の記述と，李王職次官・小松三保松が主導して刊行した『李王家博物館所蔵品写真帖』（1・2 巻，李王職，1912 年）の記述との間に顕著な相関関係が見られることが判明した。両者の異同の検討を通して，申摩実那の執筆意図として，朝鮮民族としてのアイデンティティと自負心の確立という課題が浮かび上がってきた。梨花学堂大学科との関係については，その教育理念（女性の人間化，韓国人（朝鮮人）としての矜持を育む）の反映は見られるが，専門的な内容への影響は見出し難く，むしろ女子高等教育をより一層推進するため，その成果の宣伝として利用されていたと考えられる。日本人による「朝鮮文化財」言説に対する反応としては，民族意識のもとでの，原本（『李王家博物館所蔵品写真帖』）の改変を含む選択的な受容であったといえる。